

「震災後の体験～自然・環境・隣人」

荒川 朋子

アジア学院はアジアへの侵略戦争への償いとして、1973年に栃木県那須山に創設されたイエス・キリストの愛に基づいてアジア、アフリカの農村指導者を養成するために作られた小さな学校です。「ひとといのちを支える食べものを大切に作る世界を作ろうー共に生きるためにー」という理念を掲げ、食べものを共に生産し、共に食す、という人間にとって最も本質的な活動を中心に生活しながら、人と人、人と自然が共に生きる生き方を追及しています。特に畜産と野菜・作物栽培を組み合わせた有畜複合有機農業で食糧自給を目指し、与えられた自然から人間の成長のために望ましい持続可能な環境を作り出そうと努めています。



アジア学院は2011年3月11日の震災で大きな被害を受けました。といっても東北3県の地震、津波、放射能の甚大な被害を受けた地域に比べれば大したことはないレベルかもしれません。しかし少なくともアジア学院の歴史の中で行く末を左右する大きな出来事でありました。そしてこの出来事は今「秋季宗教運動」のテーマである、共に生きること、自然、環境、隣人のすべてに関係する出来事です。

2011年3月11日、学院が創設されてから38年目、東日本を巨大な地震が襲い、栃木県北部も震度6強の揺れに襲われました。キャンパスのほとんどの建物は築40年のおんぼろでしたので、甚大な被害を受けました。新学期前でしたので、幸い海外からの学生はまだ1名もおらず、一度卒業をして2度目にトレーニングアシスタントとして戻ってきた2名の卒業生と、数名いたボランティアたち、家畜は全て無事でした。

しかし、私たちにはもう一つ大きな問題がありました。それはその翌日から起こった福島第一原発の事故による放射能汚染です。この被害は建物のように簡単には解決できないものでした。福島原発はアジア学院から直線距離で110kmのところにあります。事故のニュースを受け私たちは毎日情報収集と学習を懸命にしました。しかし情報が錯綜し、多くの疑問に襲われます。この地を離れるべきか、留まるべきか。放射能で汚染された農地で農業ができるのか。海外からの学生、ボランティア、またお客様は来てくれるのか？そして私たちの健康はどうなるのか？

パニック状態は1週間ほど続きましたが、幸いにも地元に住むある工学博士から信頼性の高い情報を得、那須の地でもなんとかやっていけることを確信し、新学期を1か月遅らせて研修を始めること、原発事故の収束を見極めるため5月～7月までの3か月間は東京町田市の農村伝道神学校の校舎に避難して研修を行うこと、その間も半分の職員は学院に残り除染とハウスなどでの食糧生産を続けることなどを決めました。そして那須ではその工学博士を中心に始まった「那須を希望の砦にする」プロジェクトという市民運動に発足から関わり、地元の住民の方々と一緒に放射能の計測、勉強会、これからの新しい生活のあり方を模索する活動を始めました。多くの新しい隣人とも出会い、協力し合い、放射能で汚染されたこの地で生きていく覚悟と共に、具体的な施策を打ち出していきました。

原発は人間の、人間による、人間のためのものです。原発がなければ起きなかった事故ですから、放射性物質の拡散はまぎれもなく人災です。そして原発にここまで頼りきった社会を作ってきた責任は、構造的に誰かにより重くあるとはいえ、

自分を含めた全国民にあります。誰か特定の個人や組織を責めることはできません。戦うべきは原発推進を進めた社会構造を作ることに加担した自分であり、すでに撒き散らされた放射能は戦う相手ではなく、避けることのできない真摯に向き合っていかなければならない相手であり、「共に生きる生き方」を探っていかなければならない相手であると思っています。放射能にいくら歯を剥いても、放射線量は減りません。脱原発を訴え続けても、今すぐ原発が消えてなくなるわけでもありません。見えもしない、においもしない放射性物質は、「どこにいますか」と丁寧に探して訪ねて、みつかったらそれをよけて避けて、自分らが安全に生きられる空間と方法を模索していく、これが今回被害を受けた地域の人々だけでなく、地震大国に54基もの原発をつくってしまった国の市民の生きるべき道、後戻りのできない道だと私は思います。今この国に住むひとはひとり残らず、そういう現実の中にあるということを実感しなければならぬと思います。



私たちは福島第一原発の事故まで、農業、特に有機農業は太陽と空気と水と土があれば、どれだけでも豊かに行えると信じていました。アジア学院で、これらをフルに活用して、神様の愛と、自然の循環を実感しながら、これからもずっと豊かな農業が、人間の真の自立のための農業が行えると思っていました。そしてこうした農業のあり方が、世界の農村の様々な問題の解決の糸口となり、人々の生活を有機的で生産的なものに変え、社会を少しずつでもよい方向に向かわせることができると信じていました。しかし原発によって支えられるエネルギー政策

に無頓着であったことが、今の現実を引き起こし、自分らが実は全く違う世界に生きていることを明らかにしました。しかし多くの人々が同じ後悔の念の中にいたのか、今回の安保法案の件では、無関心ではいけないと立ち上がった人が多くいたことは市民社会の大きな前進だと思います。



事故から5年が経とうとして、幸いにも今アジア学院の農地で生産された農産物から放射能が出ることはほとんどなくなりました。しかし2012年1月に開設した市民放射能測定所「アジア学院ベクレルセンター」で今でも毎日新しく採れた農作物はすべて計測しています。この地で自然とは、環境とは、そして隣人とはという問題と向き合いながら、アジア学院が神に与えられた使命を追求し続けたいと思っています。

(アジア学院 校長)